

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	こども発達支援まるっときつず（保育所等訪問支援）		
○保護者評価実施期間	R8年 2月 2日	～	R8年 2月 28日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	13	(回答者数) 10
○従業者評価実施期間	R8年 1月 5日	～	R8年 1月 31日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	6	(回答者数) 6
○訪問先施設評価実施期間	R8年 2月 2日	～	R8年 2月 28日
○訪問先施設評価有効回答数	(対象者数)	10	(回答者数) 9
○事業者向け自己評価表作成日	R8年 3月 2日		

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	訪問先施設の先生方と共通認識を形成し、訪問時だけでなく日常の保育・教育活動の中で継続できる支援内容を一緒に考えているため連携が取れている。	家庭の様子と訪問先での様子の乖離を埋めるため、先生からの聞き取りやご家族からの聞き取り内容を双方に伝え、双方の関係性を保っている。	管理者、児発管、訪問支援員に加えて療育担当者も含めた多職種チームでの検討体制の構築。
2	各訪問先の方針に合わせており、必要に応じてカンファレンスの必要性を伝えたり、訪問先の困りごとに対してその都度応えることで家庭との橋渡し役となり、訪問先からの満足度が高い。	現状の支援体制を否定せず、今の人数や環境の中で無理なく取り入れられる内容の提案を意識している。	外部研修への参加や事業所内での事例検討会の開催、動画などによる自己研鑽を行う。
3	ICTツールを活用し、訪問後速やかに事業所内で情報共有を行うことでチーム全体でケース検討ができる体制が整っている。	担当者一人に抱え込まず、複数の職員で訪問することでお互いに意見を出し合いケース検討を深めることができる。	客観的な評価指標の検討・導入によるより精密な支援計画の策定。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	経験豊富な支援員の確保・育成が難しく、担当者によって助言の内容や質にばらつきがある。	訪問員それぞれの経験の差があり、スキルの違いが見られる。性格などもあり、コミュニケーション不足や文章をまとめる力などにもばらつきがある。	事業所内で定期的な事例検討会を開催し、支援方針の標準化を図る。ベテラン職員の同行訪問を実施し、コンサルテーション能力の向上を図る。
2	日々の業務に追われ、全職員が専門的な外部研修に参加する時間を十分に確保できていない。	昨今のニーズの多様化（強度行動障害や重症心身障がい児など）に対し、職員が個別に学ぶ時間に依存しており、組織として体系的な研修カリキュラムが未整備となっている。	訪問支援に特化した研修や、地域の自立支援協議会等へ積極的に参加し、最新の知見を取り入れる。
3			